

文化交流

1873年 ウィーン万国博覧会

1873年はオーストリアと日本、両国の歴史にとって記念すべき年に当たります。当年、ウィーン万国博覧会が開催され、1,000以上の出展者が参加しました。この万博には700万もの観客が訪れましたが、中にはドイツ皇帝、ロシア皇帝、ベルギー国王、イタリア国王、スウェーデン国王などの王侯も含まれています。

日本の出展

万博会場では「オリエント・東アジア委員会（Comité für Orient und Ostasien）」が創設され、後には東洋との経済・文化関係促進を図るためのオリエント博物館（Orientalisches Museum）も作られます。日本にとってウィーン万国博覧会は初の国際博覧会への出展となりましたが、この出展は大きな成功を収めました。万博終了後、出展物は全て売りに出されましたが、即座に完売となりました。日本人も万博で目にした様々な物品を購入し、日本へ持ち帰りました。

岩倉使節団

岩倉使節団のウィーン万国博覧会視察は日本のウィーン万博出展をさらに格別なものとししました。この使節団は岩倉具視を特命全権大使とし、木戸孝允、山口尚芳、伊藤博文、大久保利通といった当時の日本の政治の中核をなす政治家が参加しており、1871年から1873年にかけてアメリカとヨーロッパを視察して回ったのです。同使節団は現代からすると非常に広範な見聞を行った視察調査団であり、西洋の国家形態、政治、社会、経済、技術の調査を行いました。使節団は若い留学生の派遣準備という役割も備えていました。使節団が持ち帰った知識と経験は日本に適応した形で実施され、日本の近代化、ひいては文明開化の基礎となっていきます。新しい日本がヨーロッパで収集した礎石の中には、当時のごく普通の社会通念として、植民地の思想も当然のごとく含まれていました。



ウィーン、アーデル写真館撮影「ウィーン万国博覧会使節団」記念写真
中央は初代ウィーン駐在日本公使 佐野常民
1874年1月1日 54.0×65.0cm (当時の銀線付) 個人蔵、東京
(写真提供：ペーター・パンツァー)

使節団が持ち帰った知識と経験は日本に適応した形で実施され、日本の近代化、ひいては文明開化の基礎となっていきます。新しい日本がヨーロッパで収集した礎石の中には、当時のごく普通の社会通念として、植民地の思想も当然のごとく含まれていました。

クーデンホーフ・光子、オーストリア外交官との結婚

青山光子とオーストリア外交官ハインリッヒ・クーデンホーフ伯爵との結婚は、当時や後世の人々をも魅了する恋愛物語で、いつまでも忘れがたくさせる要素が多く含まれています。

庶民の出の若き美女が玉の輿に乗り、ヨーロッパの上流貴族社会に仲間入りし、日本のオーストリア・ハンガリー帝国公使館を指揮した外交官の夫と共に東京で過ごした後、ボヘミアの自然のままの田園風景に囲まれた城や帝国首都ウィーンで生活することになります。夫は早すぎる悲劇的な死を迎えますが、光子はそれを乗り越え、32歳にして7人の子供を独力で育てていきます。その息子の一人はヨーロッパ統合の理想を持ってそのことに尽力し、後に名を馳せることとなり、彼の理想は今日に実現されています。当時の記録は夫の伯爵ハインリッヒの人格や業績を称え、彼が残した文章からは学者としての才能さえ認められます。彼は日本語も含め、10カ国語を完璧にこなしたと伝えられています。オーストリア帝位継承者フランツ・フェルディナンドが来日し、東京を訪れた際には通訳を務めたこともあったといわれています。実際、彼が東京から送った外交報告では日英同盟、日露戦争及び日本の勝利などが予告されていましたが、ウィーンの上司たちは当時、事情を察することができずに、ただ首を傾けただけでした。さて、この結婚話ですが、単にヨーロッパのエリート外交官が日本女性を妻にし、また正式に籍を入れたというだけで話題になったのではありません。ウィーンの社交界でも極東からのこの若いレディーは歓迎され、非常にもてはやされたのでした。11の異なる民族から成り、11カ国語が使用されていた多民族国家において、彼女が生活に慣れるのはそう大変なことではありませんでした。それよりもホームシックを克服することの方がずっと困難なことであったでしょう。なぜなら、日本を離れてのち、光子は二度とその母国日本の地を踏むことはなかったからです。ウィーンやプラハ滞在の日本人外交官たちとはもちろん常時交際がありました。そういう意味で、ウィーンにおいて天皇の弟宮との出会いがあったことは、彼女には感銘深く重大な出来事でした。



オーストリア軍艦上での光子とクーデンホーフ伯爵 個人蔵、ウィーン

1931年の初頭、高松宮宣仁親王同妃両殿下が世界一周旅行の途上、オーストリアにも立ち寄られたのです。汎ヨーロッパ運動の提唱者でその初代会長であった、1894年東京生まれの光子の次男リヒャルトは、母がこの出会いをいかに喜んだかを書き留めています。二つの大陸を結ぶ結婚という異国情緒豊かな話、封建時代の長い眠りから目覚めたばかりの日本を出て西洋の「近代的」帝国首都に暮らすようになったうら若き日本女性の歩んだ道、と青山光子のイメージは過去も現在も空想と記録の間でふくらみ、数多くの本に取り上げられたり、詳細を描いたテレビ・シリーズが製作されたり、少女漫画のヒロインとしても取り上げられています。シェーンブルン宮殿からそう遠くない、ウィーン・ヒッツィングの墓地にある光子の墓には常に生花が供えられています。光子への想いは今日なお生き続けているのです。

スキー

スキーはオーストリアで第一に挙げられる国民的スポーツです。しかし、その歴史は意外にも浅いのです。スキーはアルプスの地域ですら19世紀の終わりになってやっと広まったほどです。スキーは元来スカンジナビア発祥のスポーツです。ドイツ語の「スキー（Ski；シー）」という言葉はノルウェー語の「ski：木板」に由来しています。ノルウェーから来たスキーヤーはこの板を「ノルウェーの雪靴」と呼びました。スイスや南ドイツ地方では「スキー」に対して関心が深まってゆき、1890/91年の冬、オーストリア・ハンガリー帝国軍の軍人が初めてスキーの使用を試みました。



子供スキー教室 (写真提供：オーストリア政府観光局)

1897/98年にはニーダーエスタライヒ州リリエンフェルト（Lilienfeld）の町で、スキーの先駆者であるマティアス・ツダルスキー（Mathias Zdarsky）により「リリエンフェルト・スキー術」が完成されました。ストックを1本しか用いないこのスキー術は山岳地での滑降に適しており、アルペンスキーの発祥となります。この業績により1990年にはツダルスキーの記念切手が発行されました。スキーの使用における新しい可能性が開けたため、スキーは軍隊訓練の一部に組み込まれることとなります。このスキー訓練を経験したテオドル・フォン・レルヒ少佐（Theoder von Lerch）は、前述のマティアス・ツダルスキーと親交がありました。レルヒ少佐は交換将校として来日し、1910/11年の冬、雪深い新潟の高田駐屯地（今日の上越市）に滞在しました。少佐はスキー術を軍のみのものとせず、民間にも伝授したので、わずか一ヶ月後には「高田スキー倶楽部」が発足しました。レルヒ少佐はスキーの指導者として評価され、新潟県上越市に記念像が建てられました。さらに、同市にはレルヒ少佐の業績を称え、スキー発祥80周年を記念して「日本スキー発祥記念館」が建設され、また、毎年2月にはレルヒ祭が開催されています。



マティアスツダルスキー記念切手 (写真提供：オーストリア・ポスト)



レルヒ少佐 (写真協力：レルヒ博物館/旧新聞長官会)



日本スキー発祥記念館/新潟県上越市

民間による文化交流の促進活動・ウィーンの寅さん

東京とウィーンの間での度重なる交渉の末、1989年に渥美清演じる「寅さん」の「男はつらいよ」がウィーンで撮影されました。この映画シリーズは日本では映画界の古典となっています。自らの街をフィルムに収めてもらうため、数々の海外の街が寅さんを撮影に招待しようとしたのですが、寅さんが国外で撮影されたのはたった一度。舞台となった街はウィーンです。ウィーン市21区と葛飾区は姉妹都市として提携しています。映画の中の寅さんは生まれも育ちも葛飾ですので、さらなる友好関係の証としてウィーンで映画シリーズが撮影されたのでしょう。



「男はつらいよ 寅次郎 心の旅路」監督/山田洋次(1989) (写真提供：松竹株式会社)
(資料提供：ビジネス・コンサルタント、クラウス・ドナ)